会報 特攻
平成7年2月
第22号

〒105 東京都港区虎ノ門
3—6—8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

沖縄航空特攻戦

生田 惇

陸海軍同一作戦計画

昭和十九年十月三日、米統合幕僚会議々長はニミッツ提督に対し、マッカーサー元帥の支援を受けて日本南西諸島（沖縄）の攻略を命じた。その実行予定期日は二十年三月一日である。ところが比島、硫黄島の日本軍の頑強な抵抗にあって四月一日に延期された。

いっぽう、大本営も米軍の企図を察知し、昭和二十年一月中旬、日満支を一環とする戦争遂行態勢を確保し、来攻する主敵米軍を破砕する作戦方針を内定した。国防要域は本土と沖縄のような外周要域に区分された。本土決戦は「決号」、周辺作戦は「天号」として計画されることになった。

一月二十日、日本軍事史上初めての陸海軍同一の作戦計画が作成された。しかし陸海軍の間には根本的な作戦思想の相違があった。海軍が決号よりも天号を重視し、沖縄を対象とする天一号に徹底的な重点を置くのに対し、陸軍は天号よりも決号を重視した。比島作戦のため沖縄から一個師団を抽出したままその後を埋めなかったのもその現れである。そして天一号とともに台湾に対する天二号をも重視した。

日本国土を広く防衛する任務をもつ陸軍としては当然の配慮であろうが、米軍はその厖大な戦力を沖縄の一点に集中するのに対し、われは劣弱な兵力を分散せざるを得ないのである。専守防衛の作戦的な不利は歴然である。

さて、天号作戦のポイントは航空部隊の運用である。比島作戦に主力を消耗した陸海軍航空には精鋭部隊は僅少である。しかし敵の上陸前にどれだけの艦船を沈められるかが作戦成功の鍵になっていた。もはや特攻隊員の純忠に頼って組織的、大量の航空特攻のほか採るべき手段がなかった。

聯合艦隊は西日本の第五航空艦隊に同方面の作戦を担当させた。その兵力およそ五二〇機。比島で傷ついた第一航空艦隊は約八〇機をもって台湾からこれを支援するのである。そして訓練部隊である第一〇航空艦隊に特攻訓練を急がせた。その数およそ二〇〇〇と概観される。

陸軍では前年末新編された第六航空軍を充当した。しかし同軍には四月ごろ約七〇〇機の部隊の充当が予定されているものの、本土防空、サイパン、硫黄島との対戦に忙殺されていて、沖縄に対する戦備はこれからというところである。

台湾の第八飛行師団は約二〇〇機を保有しているが、満州、支那方面からの特攻隊の配属はまだ届いていなかった。天号航空作戦準備のため、何としても時間がほしいところであった。

昭和二十年一月中・下旬、比島攻略をあらかた終えた米機動部隊は台湾東方洋上に活動を始めた。これに対して第一航空艦隊が攻撃し、突入戦没した特攻隊員は一七名にのぼる。

三月十一日、福田大尉の指揮する菊水部隊梓隊の銀河二四機が鹿屋を発進し、二式大艇の誘導のもとに三〇〇〇キロを翔破して米海軍根拠地のウルシーを強襲した。目標到達は一五機であった。特攻戦没者として名を留めたのは五三名の多きにのぼる。しかし、梓隊の猛襲も敵の進攻を遅らせることはできなかった。

十四日、有力な米機動部隊はウルシーを発進した。十八・十九日空母一〇数隻基幹の機動部隊

目次

沖縄航空特攻戦……1
往時の新聞記事に見る特攻隊……5
後世に史実を伝える銅板を設置……7
人間魚雷回天（続）……8
高砂族兵士の特攻隊／薫空挺隊……11
高千穂降下部隊を讃える歌……18
特攻扱にされていない特攻隊……21
川南護国神社例大祭……24

が、南九州、四国、中国地方に来襲した。特攻兵力の温存に困難を感じた宇垣五航艦長官は、手持ち特攻隊の主力をもって反撃しかつ追撃した。同艦隊指揮下にあった陸軍雷撃機隊の飛行第七・九八戦隊も、夜間雷撃を反復して多大な戦果を報じた。

二十一日、敵機動部隊追撃のため神雷特攻隊に出撃が命じられた。野中少佐が先頭に立ち陸攻一八機が桜花一六機を抱き、戦闘機三〇機が掩護についた。敵艦隊との距離一〇〇キロと思われるころ、グラマン約五〇機の要撃をうけて全機撃墜され、第一回の神雷部隊の雄図はむなしく消えた。

かくて、この対機動部隊との戦闘で失った特攻隊員三二四名、飛行機一一九機。第五航空艦隊はその骨幹戦力を失った。

この戦闘で多大な戦果を報じたものの、米戦史では空母四、戦艦二、巡洋艦一、駆逐艦一、その他六隻の損傷を記録するにとどまる。レーダーを活用する防空戦闘指揮、輪形陣による鉄壁の防空火網、更には艦船の被害局限処置が、ことごとくわが猛攻を阻止しているのである。

海軍航空の若い搭乗員達の敵機動部隊撃滅にかける執念はすさまじいものがあった。その闘志と純忠の精神はまさに鬼神を泣かしめた。しかし、その作戦指導は不可能を断行して徒らに沖縄作戦前に戦力を消耗し過ぎたのではなかったか。その点が惜しまれる。

五月二十日、第六航空軍が、南西方面作戦に関し聯合艦隊司令長官の指揮下に入った。菅原六航軍司令官が宇垣五航艦長官より先任であったため、このような措置がとられた。

しかし、第六航空軍はいまだ戦力の掌握に大童の状態であって組織的な作戦に加入できる状況ではなかった。

相次ぐ突入

昭和二十年三月二十四日、沖縄本島に艦砲射撃が開始され、二十五日、敵大輸送船団が慶良間列島に入った。小緑にあった海軍慧星隊、台湾からも一部特攻隊がこれに突入した。

本格的進攻と認めた聯合艦隊は、二十六日、天一号作戦を発動した。これからおよそ三カ月の間、沖縄の天地は戦雲に覆い尽される。

同日未明、石垣島に待機していた伊舎堂陸軍大尉の指揮する一二機が慶良間沖の敵に突入した。翌十七日未明、満州から駈けつけた広森中尉が一一機を率い沖縄中飛行場から発進して沖合の敵艦船に突入した。これを望見していた第三二軍神参謀は、

「隼のように降下する飛行機は吸いこまれるように次々に艦艇に突入する。火炎があり爆風が艦をおおう……一瞬の静寂、何時の間にか山の彼方此方にいっぱい立っている兵や住民から一斉にどよめきに似た喚声があがる。熱湯が腹の下から突き上げてくる……」

と回想した。もとより海軍特攻も沖縄周辺に敵機動部隊を求めて発進していた。

四月一日、連合軍は圧倒的な兵力をもって沖縄本島の西岸北・中飛行場正面に上陸を開始した。わが地上部隊は、敵の猛烈な火網に制圧されて見るべき抵抗ができなかった。わが航空もまた態勢を整えるいとまがなかった。

それでも前線に到着したばかりの特攻部隊が次々と敵上陸部隊の破砕を目指して突入してゆくのである。かくてこの戦闘で散華した陸軍特攻隊は八九名八九機、海軍は一二三名六三機である。

右の経過から見てもわかるように、海軍は敵機動部隊を主敵とし、陸軍は敵の攻略船団を主敵とした。

陸軍搭乗員の遺書を見ると多くは空母撃沈を念願としているが、実際に与えられた目的地には上陸の為の艦船が充満していた。好機に好目標を捉えて突入すればよいのである。従って複座機であっても、操縦者一人でよかった。同乗者に気兼ねもなくそれだけ大きい爆弾が積めた。

海軍の場合は洋上に敵機動部隊を索め、攻撃を排除しながら突入するのであるから特攻戦没者に比して突入機数は少ない。

陸軍機は一般に航続距離が少ない関係もあって、徳之島、石垣島などに進出して、確実な攻撃を企図していた。しかし、優勢な米空軍に制圧されて、主に九州西岸、あるいは台湾北部の航空基地を多用するようになった。海軍特攻の発達基地は九州東岸、台湾中部からのものが多い。

菊水作戦

昭和二十年四月六日から、沖縄の組織的地上戦が終る六月二十二日まで、陸海軍航空特攻を統合する航空総攻撃が一〇回にわたって決行された。これは菊水一～一〇号号作戦と名付けられてい

る。

陸軍ではこのほかに地上部隊の攻勢移転に関連する航空総攻撃があった。この作戦で特攻戦没した隊員は、海軍では一五八四名（八六三機）、陸軍では一〇二一名（八八一機。義烈空挺隊を含む）にのぼる。実に二六〇〇名をこえる航空特攻隊員が戦没したのである。

この大作戦を限られた紙幅で記述することに困難なので、その大要を略述するにとどめる。

四月六日に開始された菊水一号作戦は、第三二軍の反撃、戦艦大和の沖縄突入に呼応して決行された。海軍特攻の主力は敵機動部隊に指向された。大和の突進を側面から支援する意図もあったであろう。

しかし七日、大和は東シナ海に沈み、第三二軍の反撃も成立しなかった。しかし陸海軍航空の特攻戦果は、敵の交信状況から絶大なものと判断されていた。

敵機の大量進出を許しては重大事である。菊水二号作戦は万難を排して十二日から決行された。第三二軍の夜襲に関連して陸海軍とも沖縄周辺の艦船群に攻撃を集中した。無線による突入電は、大部の攻撃成功を思わせ、連合軍の短期作戦の望みは雲散霧消した。

菊水三号作戦は四月十六日から決行された。第三二軍は主陣地を固守しており、息をもつかせぬ特攻の継続だけが現戦局を打開しうるものと観察された。この時までの海軍特攻戦没約七八〇名（約四五〇機）、陸軍は二五〇名（二五〇機）である。

この時期はまだ特攻成功率は高かった。陸軍側の集中が遅れ、大量の特攻機の集結使用ができなかったのが残念であった。しかし陸軍も四式重をそのまま爆弾と化した「さくら」弾まで繰り出して必死の努力をしていたのである。

四月下旬に決行されたのが菊水四号作戦である。陸軍では第三二軍の攻勢移転と関連して第四・第五次航空総攻撃に区分している。海軍の航空特攻戦力枯渇を陸軍が補いはじめている。

しかし沖縄米軍機の制空範囲が拡大し、前進基地の使用が困難になった。四月における戦績を米作戦年誌は沈没三、損傷一一六隻と記録している（米陸軍側の記録ではもっと大きい損害を記録し、チャーチルは英艦三隻の損害を記述している）。

五月に入り、第三二軍はその運命を賭ける攻勢移転の期日を四日と定めた。菊水五号作戦はこの日から決行された。海軍は神雷部隊を初めとして水偵までも敵艦船上に炸裂してその攻撃を支援した。陸軍もこれに劣らず戦闘機を主体とする特攻機を発進させた。第三二軍からは攻撃への感謝電が届いた。

しかし、地上軍の攻勢は停滞し五日夕刻、戦略持久に転移した。それでも陸海軍航空は特攻の手を緩めず、五月十一日からは菊水六号作戦を敢行した。しかしこれで海軍航空特攻の兵力はあらかた消えた。

五月二十四日、義烈挺進隊が沖縄北飛行場に突入し、その基地機能を二昼夜にわたって制圧した。この機を利用して行なわれたのが菊水七号作戦である。海軍は残存の神雷隊をはじめとし、練習機の白菊までも投入した。特攻兵力の主体は陸軍に移っていたが、その陸軍とても飛行機の故障によって、所望の戦力を集中しえないのが実態であった。

五月二十八日零時、大本営は第六航空軍を聯合艦隊司令長官の作戦指揮下から除いた。それは新司令長官小沢中将が、菅原六航軍司令官より後任であるとの理由であるが、裏には沖縄作戦の山場

都城を出撃する振武部隊

は過ぎたとの大本営の戦略判断があったであろう。

事実、このころ第三二軍は最後の一戦を期して島尻地区への後退を始める。

しかし陸海軍航空は地上軍を見殺しにはできなかった。五月二十八日から予定計画のとおり菊水八号作戦が決行された。陸軍は特攻五七機を戦闘機三三機が掩護して進攻し、三三機が突入成功を報じた。海軍特攻は白菊を主体としていた。

六月三日、天候が回復し菊水九号作戦が決行された。ことに陸軍の航空特攻が猛烈であり、新鋭戦闘機の特攻を主体としたために、かなりの成功を収めたようである。十日まで攻撃は執拗に続けられた。十一日、海軍陣地は玉砕した。沖縄戦は最後の段階を迎えつつあった。十八日、牛島沖縄防衛軍司令官は大本営に訣別の電報を送った。

六月二十一日から陸海軍航空は最後の特攻を送った。菊水一〇号作戦である。海軍は残る特攻の全てを投入し、陸軍は敵機の防害を考慮して四式戦装備の特攻を発進させた。沖縄全将兵、島民に贈るあまりにも尊い贐であった。二十三日未明、牛島軍司令官は長参謀長とともに摩文仁の丘で自決した。

沖縄地上軍玉砕の後も、陸海軍の航空特攻は九州からも台湾からも決行された。戦略・戦術上の見地からは、この特攻はあるいは無意味であったかも知れない。しかしこの地を本土上陸の足場とする米軍を許してはおけないし、また僚友に死に遅れた無念さを若い隊員は抑えることができなかったのであろうか。

特攻魂の再発掘

平成三年春の中東紛争では、米軍のピンポイント爆撃が絶大な成功を収めた。爆弾に装着された電子の目が確実に目標を捉えて、自ら目標に衝突するのである。

先の大戦末期、日本軍でも電波誘導による爆弾が研究されていた。しかし基礎技術未熟の悲しさ、その完成は覚束なかった。航空特攻は電子の目に代って人間が敵艦を捉えて突入するのである。陸軍の特攻隊員必携には「目をつむるなかれ、目をつむれば命中せず」とある。特攻隊員は、困難な洋上飛行の後に敵艦船を発見し、定められた諸元で敵上に占位し、吹き上げて来るような対空砲火の中をカッと目を見開いたまま目標を追尾してゆくのである。それは生易しい精神力でできることではなかった。

米戦史が述べるように第二次世界大戦全期間の沈没艦の二二パーセントが日本軍の航空特攻によっているのである。その実質的な戦果を別にしても、その激烈な攻撃の様相は敵を恐怖におとしいれた。偉大な戦果と言うべきであろう。

特攻隊員の選抜が、志願によったか、命令によったかは大いに問われるところである。制空と地上作戦協力を目的として錬成された陸軍航空では、特に問題である。

五月下旬、陸軍航空本部は特攻隊員の心理調査をした。その結果は「特攻隊員の三分の一は特攻隊員たることを最初から希望していなかった」という。願書に熱望と書いてあってもである。そこに多くの悲劇を生ずる原因もあった。

しかし、主力の三分の二は、死地に赴くことを自ら志願したのであり、今から考えれば驚くべきことである。それでなければ先に述べたような深刻かつ壮烈な攻撃を実行して戦果を挙げることは困難であろう。

陸軍航空特攻戦没者名簿の中に一〇数名の朝鮮人があったことが注目される。彼等は朝鮮のエリートであり、将校であったものはエリート中のエリートであった。彼等の心情は歴史の中に埋没して明らかでないが、その最期の言葉は決して「天皇陛下万歳」ではなかったと思う。

また、特攻の中での主要な戦力であった海軍予備学生、陸軍特別操縦見習士官出身の将校は、日本の最高学府に学んでいた若者である。決して軍部の甘言に釣られて特攻を志願したのではない。現在に生き残った政・財界の著名人がそれを証明する。

戦後、日本の歴史はマッカーサーの指令と東京裁判によって、大きく歪められた。これを正すことなくして、特攻戦没者の心情を理解することはできない。彼等は日本の歴史の正しさを信じ、民族の繁栄と父母、兄弟姉妹の安全をひたすらに願って死地に赴いたのである。

米英に対する滾(たぎ)るような敵愾心もあったであろう。しかし、それは今や恩讎の彼方である。

日本の将来の発展のために、戦前、戦中の歴史と戦没特攻隊員の魂の再発掘は、緊急かつ重大な課題と信じられる。

往時の新聞記事に見る特攻隊

出撃の命は下る

敵主力空母那覇近海に出現の情報がここ某基地部隊本部にもたらされ、

「皇国の興廃は将にこの一戦に決す。諸子はしっかり落着いてこの大任を果すよう」最後の訓示を与へれば林隊長は誓って大任を果さんことを力強く誓った。壮行の宴といっても僅かに料理はするめだけ最後の、

しかし飛行団は余が手塩に掛けた新鋭の隊である。その威力を十分に発揮されるやう期待する。日露戦争の時東郷元帥は敵の艦隊主力を撃滅し勝利の鍵を得たやうに諸子の挙げる成果がこの戦局を一大展開せしめることを期待してゐる。

隊員の一人々々は軽い微笑さへ湛へ、五体に必殺の闘魂をみなぎらして言葉少なに語るのだった。やがて出撃の時は来た。航空部隊指揮官を始め親鷲部隊長、基地勤務員の人々の心からなる見送りを受け、「国宝神鷲大為報国」墨痕鮮かに書かれた日の丸の鉢巻をぐっと引締め、林隊長以下全員機上の人となった。絶好の攻撃日和、爆、

神風隊六回突入

石垣島付近出現の敵部隊も撃破

卅日夜間より卅一日夜間、一日朝にかけて前後六回にわたりわが神風特攻隊を先頭に航空部隊が出撃沖縄本島周辺および琉球列島各島に蠢動する敵に対し果敢なる攻撃を加へた、すなはち卅日夜間まづわが航空部隊出撃して琉球列島に行動中の敵の輸送船団を攻撃、油槽船若くは空母一隻を撃沈、巡洋艦一隻を撃破、上陸用輸送船一隻を撃沈、駆逐艦一隻を撃破、大なる損害を与へた、一日の早朝にはわが神風特別攻撃隊が奄美、琉球海域の敵船団に突入し大輸送船一隻に命中これを撃沈、輸送船一隻に命中これを撃破、輸送船一隻に同じく一発命中これを撃破、輸送船二隻に命中炎々たる火災を生ぜしめ、また輸送船の二隻にも飛行機が爆撃を敢行した、さらに敵機動部隊は一日朝に至り琉球列島南端の石垣島付近に出現したのに対し同じくわが神風特攻隊が出撃、敵機動部隊に突入、敵大型空母一隻に命中これを炎上、次で他の一隊は同敵部隊に撃破を反覆した、現在迄の戦果は確認されたもののみであるが、他にも相当の打撃を与へつゝある模様である

神鷲・陸の特攻隊員

去る三月廿九日朝寺山大尉以下八機を以て那覇西北海面に不敵な野望をこめて頻繁する敵艦隊に敢然必死必中の体当り攻撃を敢行して中型輸送船二隻撃沈、一隻撃破の輝々たる戦果をあげた陸軍特別攻撃隊員の氏名と出身地が明かにされた

寺山欽造大尉　千葉県東葛飾郡柏町柏六二四、大正十年生、東京師中学を経て陸士卒

高瀬一少尉　佐賀県佐賀郡南川副村大字犀江二二八、大正十二年生、佐賀師本科三年卒、特攻出身

山川貫一曹長　福岡県福岡市西部警部町大字小阪部一四〇六、大正十年生、少年飛行兵出身

堀口政則軍曹　高知県東日井郡南方村大字南方甲三八七、大正九年生

菊田原治軍曹　小橋市稲荷町四三丁目九番地宅内市鶴川町八六、大正十三年生

上村隆男軍曹　新潟県北魚沼郡小千谷町東吉谷甲八二四（留守宅荒川西三河屋町一の四七五）大正十五年生

金田新市伍長　福島県大沼郡本郷町字三枚橋甲一七五八の二、大正十四年生、少年飛行兵出身

大河正明伍長　朝鮮咸鏡南道咸州郡咸南邑西湖里五〇、昭和三年生、少年飛行兵出身

◇

また陸軍特攻武勇隊勇士の出身地氏名は次の如くである

藤森邊郎中尉　三重県鈴鹿郡白川村大字白木一九三九、大正十年生

林一高少尉　大阪市中河内郡三野郷村大字市場八七八、大正十一年生、大阪陸大高商部卒、幹候出身

酒宗孝己少尉　鹿島県双三郡十日市町大字島敷甲一七〇〇、大正七年生、日大商経部卒、特操

出身

出戸栄吉軍曹　金沢市蓑下町一〇一の二、大正十三年生

今西修軍曹　京都府愛宕郡醍醐町野村大字市原字中在地（留守宅京都市左京区下加茂中川原町五三）大正十五年生

大平定雄伍長　東京都荏原郡川崎田端町一〇六一、大正十四年生

伊藤孝兵長　鹿児島県姶良郡山田村下名一〇六二、大正十五年生、少飛出身

塙田真三軍曹　東京都荏原郡川崎田町川町四四〇、大正十四年生、聖橋工業卒

今野勝郎軍曹　宮城県加美郡小野田町四小野田字味ケ袋埜の内一七、大正十四年生

／た。神機到来、かねてこの日を待ち佗び待機中の精鋭陸軍特攻隊振武隊に出撃の命は下った。部隊本部に集った隊長林少尉（石川県出身）ほか、隊員の面は一瞬殺気を帯び、決意の色がありありと漲った。出撃を前に狭い本部の一室でささやかな壮行の宴が催された。大きい日の丸の国旗を前に並べられた二つの机には今を盛りと咲き誇る桜花二枝、一死報国の精神に生きる神鷲の壮途を祝福してゐる。

神鷲達のこの壮途を祝ふ部隊長は／杯をぐっと飲みほす隊員の顔は何等平常と変るところがない。この日〇〇航空部隊指揮官はこの基地を親しく訪れ出撃直前に隊員一同に烈々肺腑をつく訓示を与へたのだった。

神機まさに到来せり、満を持してゐた本隊に出撃の命は下ったのだ。諸子は今までさぞかし髀肉の嘆き堪へなかったことであらう。

／音高らかに砂塵を蹴って悠久の大義に生きる特攻隊員はここに出撃したのだ。

（朝日20・4・10掲載）

振武隊沖縄へ征ク

頸二八真紅ノ練絹

還ラヌ基地、爛漫ノ桜

「某基地ニテ伊藤本社特派員発」

けふも振武隊の若い陸軍特攻隊員は沖縄本島へ一撃必殺の爆弾を抱へて飛んで行った。基地の桜は満開である。飛行帽の下に日の丸の鉢巻をきりりと結んだこの若桜達は基地の桜より一足先きに莞爾として大国難の前に散って行ったのである。

沖縄本島とこの振武隊基地とは〇〇キロを距ててゐるに過ぎない。記者は特に許されて「〇〇戦闘指揮所」と記されたバラックの中の特攻隊員らの憩ひの部屋で出撃命令を待ってゐる若い神鷲達と、ほんの僅かな時間ではあったが親しく語ることが出来た。幾時間の後には一機一艦と刺違へて散り行くこれらの特攻隊員にとって私は最後の一人の面会人であったわけである。しばらくはなんと言葉をかけていいか挨拶に困った。

みんな廿歳を超えたばかりの紅顔の若鷲である。真紅のマフラーを頸にまいて真新しい日の丸の鉢巻を真一文字に結んでゐる。この真紅の練絹のマフラーが特攻隊員に選ばれた誉れの象徴なのである。この若鷲たちは申合せたようにみな飛行服の後襟にマスコットの吊人形を提げてゐた。姉さんかぶりをして絣の前掛をかけた東北のオバコ人形が多かった。この人形たちは若鷲たちが互に肩を叩いて笑ふ度毎に前を向いたり後を向いたり若鷲の肩中で踊ってゐた。そのあどけない恰好でこの人形も敵艦に突っ込んで行くのかと思ふとたまらなく、いとほしいものに見えた。ぐっとこみあげて来る熱い感情を押へて私はしばらく目を閉ぢた。窓外には雲雀が無心に鳴いてゐた。

ふとわれにかへって傍の若鷲をふり返へると、この若鷲（注、友枝少尉）はいま一心に真新しい千人針の胴巻きをつけてゐるところであった。中ほどにたった一つの五銭玉のついた千人針だった。「どなたの贈物ですか」と尋ねたら、即座に母が贈ってくれました」と答へた。そしてこの若鷲は独りごとのやうに「私の母はからだが弱くて」と付け加へた。必死必中の出撃の前にすでに生死を超越した神の化身だが、やはり母のことは忘れてゐなかった。この若鷲はこの日のためにとっておいたこの千人針を取り出してふと病身の母のことを想ひ出したのであらう。この神鷲は真珠湾の九軍神の一人古野少佐と同窓の東筑中学第卅九回卒業生だと語った。

この時すでに準備線に就いてゐた特攻機は砂塵をあげてプロペラの始動を開始してゐた。出撃にあと十分の基地であった。（大阪毎日20・4・10掲載）

新鋭の威力示す秋
葬れ一機一艦

敵米英沖縄侵攻の神機を狙って猛然奮起航空決戦に敵艦船〇隻を轟沈破した殊勲の陸軍特攻隊振武隊は、〇〇航空部隊指揮官を育ての親とする陸軍の新鋭飛行部隊で航空士官学校出身の覇気凄絶な若桜を中枢として結成された。出撃の命令降った日特別宿舎に最後の一夜を明した隊長林少尉以下の特攻隊員は必死必殺必勝を期して征でゆく心境を寄せ書に示したのち本隊で最後の乾杯をあげた。

〇〇部隊長より戦闘指揮あり更に「皇国の興廃は実に今日のこの一戦に懸ってゐる。しっかり落ついて任務を達成大戦果をあげよ。御健闘を祈り且つ御成功を祈る。」と激励の辞を受けるや林隊長は、「実に皇国の興廃を負ふ自分等隊員は打って一丸誓って御期待に添ひ奉ります。」と決意のほどを凛然と答へる。かくて式を終へ神機は正に到来した。満を持して待つ攻撃命令は下ったのだ。

〇〇航空部隊指揮官の烈々たる訓示を受けた後、隊員は僚友と別れの談笑に一時を送りおはぎ、まんじゅうに最後の肚をつくって機上の人となったのであった。見れば機長の赤いマフラーは彼等の燃ゆる赤心を表徴するかの如く春光に映えて美しく日の丸の鉢巻には床しくも桜花一輪がさされてゐる。背には守護の神であらう可愛い小さなお人形をおんぶして莞爾として地上に波打つ軍官民多数の大歓呼に応へる。

出撃直前林隊長以下全員は記者団と会見したが、「今更別に感慨とてない。ただ必勝を確信し後に続くものを信じて征くのみ。任務は必ず達成する。」と語り淡々とした心境のほどを綴った達筆揃ひの寄せ書を示した。振武隊寄せ書　「轟沈」隊長林弘少尉、「捨身必沈」林玄郎少尉、「断」伊藤少尉、「肉弾」孫谷軍曹、「尽忠報国」浜谷少尉、「一突轟沈明道」上津伍長、「無」田中少尉、「貫徹」石賀伍長、「闘魂」斉藤伍長、「必殺」友枝少尉

（読売報知20・4・11掲載）

死に切れぬ任務あり
最後の手紙に烈々たる覚悟

林弘少尉は日本海に程近き松籟の音しげき黒崎部落の簡素な家に二兄二姉の末ッ子に生れ、厳しく育ち黒瀬国民学校を優等で通し大聖寺中学へ入り優秀な成績で四年から陸士予科を経て航士へ入校。両親や二姉には、「死は生であり、皇国のため花とさくことである。体当りして一機一艦をやっつける

秋であるが泣いて下さるな」と立派な死生観を説いた。

豪気果断、陣中からの便りにも、「御両親様はじめ皆様には御障りもございませんか。不肖去る日南方に征くところ愛機の故障で取止めとなり残念でありますが、当部隊の任務は実に重大そのものにして、よってもって皇国の興亡の決するところにて全員きはめて士気旺盛、最近情勢は敵艦載機の侵すところとなり、いよいよ驕敵撃滅の闘魂に燃えてゐます。やがて母校の桜もさくでせう。この桜花の散るやうに笑って悠久の大義に散るべき日を思ひ、ますます敢闘必ず御期待に副ひます。」とあり、また最後の便りに「皇国未曽有の重大危局に当り同期生は次々と特攻体当りで皇国護持に散っていきます。残される心境いかばかり、ひとり腕を撫して時到るを待っています。二、三日中に南方へ征くことになり喜んでゐる。生死は問題でありません。軍人は死んでも死に切れぬ任務があります。この任務遂行に全身全霊を捧げすめらみ国に奉ずる覚悟です。山高海深の御両親様のご恩に対し厚くお礼申し上げます。遺髪、遺爪、写真は身廻り品と共にお送りいたします。」

その遺留品が九日鉄道便で届いたがその中にも半紙に墨書で「皇国の無窮を信じ欣然として悠久の大義に死す。」と心境を伝へてゐた。

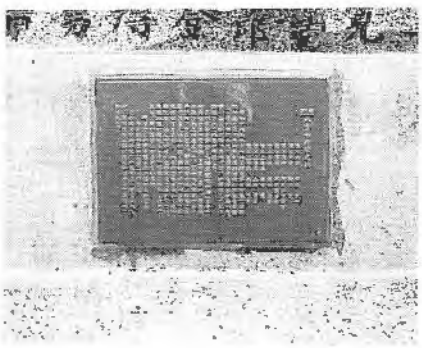
（北国毎日20・4・11掲載）

初の頁枠内の記事は20年4月3日の読売報知のもの、そのほかは寺井俊一編「都城特攻振武隊」（原書房）より転載。

都城はやて之碑

後の世に史実を伝える為に銅板に刻んだ碑文を設置

全日本空挺同志会



右は碑の表、左は碑の裏面にはめ込んだ銅板

24頁記載川南靖国神社の南方六キロ程の所を流れている小丸川で殉職した八勇士を追悼する碑が、現地を見下す台上に立っているが、由来を刻んだ碑文はない。往時を知る者がいなくなっても後世に伝える為、戦友相計かり左記碑文を刻んだ銅板を碑にはめ込んだ。

忠烈八勇士殉職之地

陸軍大尉　伊藤　成一
陸軍中尉　鈴木　寛
陸軍准尉　河原田津留吉
陸軍曹長　平方國三郎
陸軍兵長　池本　治登
陸軍上等兵　杉村　博
陸軍上等兵　山崎　茂男
陸軍上等兵　大森　良市

昭和十八年六月十八日挺進第四聯隊では新に所属となった将校の実兵指揮の訓練を実施し、その中に小丸川を渡渉する場面があった。前日山間部に降った雨で河川が増水しており、押流されて八名が殉職した。

この演習を計画した榊原達哉中尉（当時）は責任を負って自決しようとしたが、聯隊長に諭され思い止まった。翌十九年聯隊がレイテに降下するとき、榊原大尉は地上部隊と提携できる見込みの全く無いタクロバン降下部隊指揮官を志願し、八名の位牌を抱いて飛行機に乗り込んだがその後の状況は詳かでない。殉職八柱の魂魄もレイテ作戦に参加したのである。碑の裏面に刻まれている歌

何日行くか何日散るのかは知らねども
今日のつとめに吾ははげまん

この碑は初め小丸川の堤防上に建てられたが、堤防改修工事の為昭和四十年に現在地に移された。

人間魚雷「回天」（続）

靖國神社では平成5年7月日13日（みたま祭第一日）より、次の標題で特別展を実施した。

遊就館特別展
学徒出陣五十周年 蘇る殉国学徒の至情
平成六年八月十五日まで

入場者は延二〇万人あったという。それと共に本年八月には次の書名で、一冊の本が発刊された。

いざさらば我はみくにの山桜
靖國神社編

これは特別展の記録であって、展示された六十五柱の写真と遺書等が掲載されているが、その中で回天に係るものを神社の了承を得てここに転載することにした。

宇都宮秀一命
東京帝国大学
石川県出身
海軍第三期兵科予備学生
大正10年1月2日生
昭和19年11月20日没
満23歳
海軍大尉

昭和十九年十一月八日、回天特別攻撃隊「菊水隊」隊員として、伊号第三七潜水艦に乗り組み徳川湾・大津島基地を出撃、二十日、パラオ・コッソル水道海域にて戦死。

宇都宮少尉は、当時、東京帝国大学の主任教授であった国史学の泰斗平泉澄博士の国体護持の歴史観に共鳴し、先人が命を賭して連綿と護持し来たった我が国体を後の世に継承すべく、自らも一命を捧げんと人間魚雷「回天」での特攻を望んだ。

回天は、同じ平泉門下の黒木博司少佐が、衆寡敵せず、四面楚歌の状態に追い込まれた我が方を起死回生させるための特殊兵器として着想したものであった。

昭和十九年九月七日、黒木少佐は回天の潜航訓練中に殉職するが、この後を受けて回天出撃の第一陣となり特攻戦死したのが、いわば弟弟子の宇都宮少尉であった。

ひとたび優れたる師にまみえ、我が先人の皇国護持の歴史を知るや、少尉はただちに自らも真の日本人たらんと決意し、その日より袴を着用し続けた。

さらに、男児志を立てたなら、その実行が伴わなければならないと考え、まず水戸学を生んだ水府に向かい、そこから一晩かけて下駄履きで東京の自宅へ帰ったという。

宇都宮少尉とはかかる熱血・剛胆の人であった。

塚本太郎命
慶応義塾大学
茨城県出身
海軍第四期兵科予備学生
大正12年10月4日生
昭和20年1月21日没
満21歳
海軍大尉

昭和二十年一月九日、回天特別攻撃隊「金剛隊」隊員として、伊四八潜水艦に乗り組み徳山湾・大津島基地を出撃、同年一月二十一日、ウルシー泊地の敵艦に突入、戦死。

「母に元気をつけてやって下さい。お願いします」と塚本少尉に頼まれた近所に住む野村宗一郎氏は、戦後、焼け出されて防空壕生活をしている塚本家の境遇を見兼ねて、資金の提供を申し出る。

昭和二十三年、塚本家は野村さんと共同出資で、塚本少尉が愛した地域の人々のためにもと、風呂屋を開業した。

塚本少尉の名をとり、「太郎湯」と名付けられた風呂屋の入口には、生前、彼がよく口にした格言「自分のためには汗を流し、人の為めには涙を流

せ」に因んで、次の言葉が掲げられていた。

自分のためには
　汗を流し
人の為めには
　涙を流せ
皆さんの汗は
　太郎湯で流す

亡兄の思いが込められた「太郎湯」は、弟悠策さんが採算を度外視して平成四年三月まで営業し続けた。

長男だったため、血書嘆願の末に特攻隊員となった塚本少尉は、慶大時代、水球部のゴールキーパーとして活躍、日本代表に選ばれて海外に遠征したこともある。今でも同大学日吉校舎の水球部合宿所には、彼のゴールキーパー勇姿レリーフが飾られている。

早稲田大学

市川尊継命

新潟県出身
海軍第四期兵科予備学生
大正10年7月8日生
昭和20年2月26日没
満23歳
海軍大尉

昭和二十年二月十九日、硫黄島に米軍が大挙して来攻する中、伊号第三六八、同三七〇、同四四潜水艦三隻からなる回天特別攻撃隊「千早隊」が編成された。楠正成の故事に因んだその名は、孤軍大敵に背水の戦いを挑む三隻にふさわしかった。伊三七〇乗組となった市川少尉は、その夜、遺書を書く。

〈父上様、尊継はやはり父上の御気性を受け継ぎました。人生二十五年を真紅に飾ります。

母上様、お会ひして四方山話を致す処は、私が席を設けてお待ちしております故、ごゆるりとお出をお願いします〉

二十日早朝、市川少尉たち千早隊員は光基地で出陣式を行い、白い菊水の旗のひるがえる伊三七〇、三六八に乗艦（伊四四は二十三日出撃した）、白い鉢巻きをしめ艦上に固定した「回天」の上に直立し、軍刀を高々とかざして「総員帽振れ」の中を静かに出港していった。

二十六日、村潜哨戒の航空機と艦艇のひしめく硫黄島近くまで迫ったが米艦艇の猛攻を受け、ついに特攻出撃の機会を得ず潜水艦乗員と運命をともにした。

亡母市川トヨさんの思慕

〈尊継二十二年間の想い出は、数え切れぬほど沢山ありますが、そのどれを思い出しても、いまだに目頭が熱くなります。

（中略）

小学校の時、ただいまのNHKの第一ラジオ放送の子供の時間に「こひばり」と「汽車ポッポ」を独唱したことがあります。現在のように録音テープがございましたならと（中略）大変残念に存じております。（中略）

いつのことでしたか、絣の着物を新調し、縫って与えたことがありました。それまでは、たいてい兄のお下がりばかりだったので、よほど嬉しかったらしく、それを一着に及ぶと「黒田節」を踊りはじめました。まアこの子がいつどこでどうして覚えたのかと、感心したことを思い出します。

昭和十八年、学徒出陣の日、尊継は送別の席上でその「黒田節」を晴れやかに舞い納めて、還らぬ壮途につきました。

あの時の思い決したあの子の顔を、わが子ながら美しいと感じて、今もなお胸底深くしまっているのでございます〉

慶応義塾大学

田中二郎命

兵庫県出身
海軍第四期兵科予備学生
大正9年11月24日生
昭和20年2月26日没
満24歳
海軍大尉

昭和二十年二月二十日、回天特別攻撃隊「千早隊」隊員として、市川尊継少尉ら四人の隊員とともに伊号第三七〇潜水艦に乗り組み光基地を出撃、二十六日、硫黄島海域にて戦死。

早慶両大学出身にして、予備学生も同期の二人（田中少尉・市川少尉）は同じ特攻隊員として、しかも同じ伊三七〇潜に乗り組み、回天（衰えた勢いを盛りかえすこと）の夢を求めて南溟に散った。

出撃の間際、父へ遺書をつづり残している。

〈帝国真ニ危急存亡ノ秋、不肖二郎特別攻撃隊ノ一員トシテ体当リスルハ真ニ本懐ナリ。入隊以来御無沙汰許リ致シ、誠ニ申訳ナシ。深ク御詫ビ申上候。然乍ラ不肖二郎も父上ノ申サレシ如ク、心身ノ全テヲ大君ノ御為ニ微力乍ラ御役ニオ立テ申サバ、御許シ被下事ト存ジ候。

末筆乍ラ永々ノ御薫陶深謝仕候。

父上様〉

大阪商科大学
久家稔命

大阪府出身
海軍第四期兵科予備学生
大正12年4月12日生
昭和20年6月30日没
満22歳
海軍大尉

久家少尉は、昭和二十年六月四日、回天特別攻撃隊「轟隊」隊員として、他の五名とともに伊号第三六潜水艦に乗り組み大津島基地を出撃、マリアナ東方海域に向かった。六月三十日、一万トン級タンカーを発見、一号艇が発進した。

しかし、その直後から敵駆逐艦の爆雷攻撃がはじまり、悪魔の怒号のような炸裂音が伊三六潜に降り注いだ。

浸水がはじまり、艦内いたるところに故障が発生、艦内の温度は上昇して、まさに灼熱の鉄筒の中で死闘が続く。回天も、残る五基のうち使えるのは二基だけとなった。

「このままでは母艦がやられてしまいます」と、久家少尉は回天の発進を艦長に迫った。

その必死の願いに「爆雷でやられる前に動かせる回天だけでも……」と決意した艦長は、二基に発進を命じた。攻撃開始から二時間が経過していた。

二〇分後、爆発音が海底にあえぐ伊三六潜をゆさぶった。敵の攻撃は止んだ。伊三六潜は無事帰投した。

後に発見されたご遺書に、回天の故障で帰投する隊員を思い「くれぐれも暖かく迎へてくれ。死んでゆく俺の唯一の心残りは、それだけなのだからくれぐれもたのむ」と、書き遺してあった。

久家少尉自身、金剛隊と天武隊で出撃していたが、二回とも艇の故障で無為に終って帰投した時の苦い思いを、彼らに再び味わわせたくなかったのであろう。

早稲田大学
水知創一命

兵庫県出身
海軍第四期兵科予備学生
大正12年10月29日生
昭和20年7月16日没
満21歳
海軍大尉

昭和二十年六月十五日、回天特別攻撃隊「轟隊」隊員として、伊号第一六五潜水艦に乗り組み光基地を出撃。七月十六日、マリアナ東方海域にて戦死。

光基地から母妹宛書簡

母上様

私こそ身はたとへ朽ちるとも、永遠に母上をお守りします。私に万一のことがありましても、決して髪など切らず、笑ってゐて下さい。昭子はじめ弟妹が可哀想です。まだまだ慎二もゐることですし、もっともっと気を強く持って元気にお暮らし下さい。（中略）私の母上へのお願ひは、朗らかに呑気に暮らしていただきたいとです。

創一

昭子様

昭子は何んといっても母上が一番頼りにしてをられるのだから、皆なをよく導いて極力母上に元気をつけて上げて下さい。兄がお前に望むのはただそれだけです。いま一度言ひます。母上に元気をつけて上げて下さい。

昭子の朗らかな呑気な性質を母上にうつして、皆んな元気に、明るい生活をして下さい。早くよい人（私のかはりに母上の面倒を見るやうなやさしい人）をみつけ、一日も早く母上を安心させてあげて下さい。

創一

明治学院大学
関豊興命

秋田県出身
海軍第一期兵科予備生徒
大正12年1月21日生
昭和20年8月4日没
満22歳
海軍大尉

昭和二十年七月十四日、回天特別攻撃隊「多聞隊」隊員として、伊号第五三潜水艦に乗り組み大津島基地を出撃、八月四日、沖縄南方海域にて敵船団を攻撃、戦死。

〈二十三星霜のご高恩、心より御礼申上候。万感胸に到りて一句も無之候。何卒意中御察被下度候。父母上様の御健康を神かけて祈りつつ出撃致す心算に候。

峯高き五の宮の山そのよはひ我が
たらちねの父母にこそやれ
風邪ひくな寒からぬかと我が夜着
をたれかとりみん父母ならずして

追伸

多聞とは楠公幼時の名前にて候。本隊の回天隊の名も頼山陽の楠公論の所に見ゆる如く、天日の既にかくるるを回すより起きたる名にて候。

同書並びにハンカチの血は、小生の血にて書けるものにて候。

菊水の流れの如く七生報国を誓い申上候〉

高砂族兵士の特攻隊

薫空挺隊

ガダルカナルで敗れ、ニューギニアで敗退を続けているとき、南方のジャングル内で遊撃戦を行う専門部隊を正式に編成することになった。

昭和十八年十二月二十四日、台湾軍は、遊撃第一中隊、同第二中隊の編成を命ぜられた。

この第一中隊の一部が後に「薫空挺隊」となるのだが、両中隊とも総人員一九二名、兵の人数は一五二名だった。その一五二名の兵のうち、通信、衛生の特技者を除き、台湾の高砂族をもって充てた。従って高砂族の兵は一個中隊一四〇名ほどいたと思われる。

高砂族とは台湾の先住民族だったが、中国大陸から移住した所謂本島人に圧迫され、山の中に住むようになった。日清戦争（一八九四―九五年）の結果、台湾は日本の領土となり、高砂族も日本国籍に編入されたが、文化程度が低く、日本の統治に服さぬ部落もあった。しかし逐年教化が進み、元来性質が純朴だったので、この頃は本島人よりも国策に協力的になっていた。

この高砂族も元を尋ねれば、オーストラリヤかニューギニアあたりから、漂流して来た民族と言われ、台湾でも山の中で狩猟や原始的農業に従事しているので、ジャングル内の行動に長じている。

それに部落ごとの抗争を事とした先祖の血を受け、尚武の気性に富み、ジャングル内の遊撃戦兵士として、うってつけの素質を持っていた。

そのようなことから、陸軍では高砂族を主体にしたジャングル内専門の遊撃部隊を作ることになった。先にも述べた通り、将校、下士官と通信手や衛生兵は内地人をもって充てた。しかも将校、下士官の大部は、陸軍中野学校で遊撃戦を専攻してきた者だった。

台北の台湾歩兵第一聯隊の補充隊で、部隊を編成し、湖口の演習場で訓練に励んでいたが、十九年五月愈々戦場に出ることになった。

五月二十八日高雄出港、このとき第二方面軍の隷下に入った。第二方面軍は西部ニューギニア以西、フィリッピンとインドネシヤの間にある地域を作戦区域としていた。

大本営では、初めニューギニアで両中隊を使う考だったが、この頃は既に、ニューギニアは敵に抑えられ、戦闘の焦点はビアク島から更にモロタイ島、ハルマエラ島に移ろうとしていた。

両中隊は六月二日にマニラに上陸したが、第二中隊は間もなくハルマエラ島に移り、第一中隊はルソン島に残った。第二中隊は九月から、モロタイ島で大活躍をするのだが、これは主題から離れるので省略する。

ルソン島に残った第一中隊は、リパで訓練していた。この頃初代隊長の神田少佐が病で倒れ、中隊付の尾山大尉が隊長となった。

十月二十日、敵がレイテに上陸、台湾沖航空戦の戦果を過信した大本営は、計画を急拠変更しレイテ地上決戦にふみ切った。

しかし、東部レイテの飛行場が敵に奪取されるや、彼我の航空戦力の差は益々大きくなり、マニラからオルモックに向う輸送船は片っぱしから撃沈された。

マニラにある第十四方面軍が、レイテに送り込んだ主な部隊は、第一師団、第二十六師団、第六十八旅団である。

第一師団の海上輸送は成功した。次の第二十六師団は、十一月十日、イビル海岸に到着したとき、空襲を受け人員は辛じて上陸したが装備一切を失った。次に送り込むべき第六十八旅団についても、その前途暗澹たるものがあった。

一方第四航空軍は、十一月十三日のマニラ大空襲をはじめ、累次の空襲によって甚大な損害を受けたが、戦意少しも衰えることなく、海軍に続いて敵艦に対する体当り特攻を開始した。

この頃、内地から到着した第二挺進団（高千穂部隊）が、第四航空軍のれい下に入り、この部隊を、来月初に予定しているブラウエン攻撃に使う計画だった。

これとは別に、第四航空軍では、遊撃第一中隊の一部をモロタイ島の飛行場に強行着陸させ、敵基地を破壊しようと企図していた。

モロタイには、敵B―24爆撃機の基地があり、これがわが船団に対し猛威を逞しくするためである。

ところが、十一月下旬になると、レイテの敵飛行場の整備が進み、モロタイよりもレイテの飛行場攻撃の方が急を要する状況になった。

レイテで敵が使っている飛行場は次の五つだった。（　）内の数字は、十一月十七日偵察結果の在地機数。

タクロバン（約二〇〇機）
ブラウェン北（約一〇〇機）
ブラウェン南（約一〇〇機）
サンパブロ（少数）

ドラッグ（少数）

そこで、第四航空軍では、遊撃第一中隊の一部を、飛行第二百八戦隊の零式輸送機（DC－3）に乗せ、ブラウェン両飛行場に対し強行着陸攻撃を実施させることにした。

この命令が出されたのは、十一月二十二日で、部隊名を「薫空挺隊」、作戦名を「義号作戦」と呼んだ。

この頃、高千穂部隊の方は、司令部と挺進第三聯隊が、アンフェレスに到着しているものの、第四聯隊は海上輸送中、飛行戦隊は嘉義で練成中で、すぐに作戦開始できる状態ではなかった。

義号作戦は、二十六日に決行された。

中重夫中尉以下四十数名の薫空挺隊は、第二百八戦隊桐村浩三中尉以下八名の操縦する輸送機四機に搭乗、夜間リパを離陸、ブラウェンに向った。

月齢は十日である。零時頃ブラウェンに着陸する計画だったが、その後の行動は不明な点が多い。

一機はバレンシャに不時着し、搭乗人員は、第二十六師団と行動を共にしたことは確かだ。

零時過ぎ頃、オルモックの軍司令部から東方の山系を望むと、盛んに火の手が上るのが見えたというし、一時過ぎ、ブラウェン上空にわが偵察機が進入したが、いつもの激しい対空砲火はなかったという。

これだけの徴候では、ブラウェン飛行場に着陸成功し、戦果を挙げたと断定することはできない。

米軍の記録によれば、ドラック海岸附近に二機着陸し、乗員が闇の中に消えて行ったという。多分これが、脊陵山脈を越えた三機のうちの二機であろう。

その人々がどのような活躍をしたのか、残念ながら詳かでない。

敵飛行場を襲撃した後、ダカミ附近に潜行し、第十六師団に合流するよう命ぜられていた。ジャングル内の行動に長じていた高砂族の兵だったから、何人かはダガミまで辿りついたのかも知れない。

第十六師団は、義号作戦から十日後にブラウェン北飛行場に突入した。そのとき高千穂部隊が飛行場に降下し、百人以上の者が第十六師団に合流しているが、この人々の最後も明らかでないほどだから、二、三十名の最後は知る術もない。

それほど、レイテで戦った部隊の末路は悲惨だった。

最後は全員戦死したにしても、どんな活躍をしたのか、――当時のフィリッピン駐在村田大使の日記が、村田省蔵遺稿比島日記と題し出版されている。これをみると、十一月十三日に寺内元帥を訪問したとき、航空特攻や人間魚雷と並んで、この高砂族の部隊のことが話題に出たように書いてある。必要あれば爆薬を背負い敵中に突入するのだと。

註　南方総軍司令部は、この頃マニラにあたり、その後間もなくサイゴンに移った。

これほどの意気込みを持った部隊だったから、唯では死ななかったろうと思うだけである。

それでは、薫空挺隊を差し出したあとの遊撃第一中隊はどうしたのか。

三陣に分れてマニラ発、船でレイテに向った。

十一月二十八日　豊田准尉以下二八名

十一月三十日　尾山隊長以下主力

十二月一日　茶園曹長以下二一名

この中で、第二陣の尾山大尉の率いる主力は、翌十二月一日、カモテス海で空襲を受け沈没、全員戦死。

第一陣と第三陣はイビルに上陸、第二十六師団に配属され、オルモック附近で戦闘したらしい。

戦後、茶園曹長と高砂族一名が帰還したが、茶園曹長も既に故人となり、これ以上のことはわからない。

遠い先祖以来日本の国に生を享けた者が、国家非常の際命を捨てるは当然のこと、これは世界的通念でもある。

しかし、国家間の勢力の変遷で一時的に日本人となった高砂族の兵士が、このように名もなく死に、日本人の記憶から消えてゆくのは申訳ないことである。

厚生省援護局に保管されている名簿をみると、当人は日本名で記載されているが、留守担当者欄には片仮名の名前が記載されている。靖國神社には合祀されているが、日本国籍を失ったので遺族年金は支給されていない。

同盟通信の記者が見た
薫空挺隊出撃前の景況

同盟通信記者大森建道氏は19年9月従軍記者として比島に渡り具さに苦難を嘗め、20年2月25日ツゲガラオから辛くも空輸脱出する。昭和60年「比島従軍日記」と題する単行本を善本社から出したが、その中に薫空挺隊のことが十数頁に亘って掲載されている。著者はすでに物故されたので、この度善本社山本社長の了解を得て該当個所を転載することにした。

「義号作戦」の訓練を見学

十一月十八日

午前、四航軍の会見で、特攻作戦「義号作戦」が近く決行されるとの感触を得たので、岩本支社長にこれを報告する。そして午後、写真の箕浦特派員と基地だと推測されるリパに向かい夕刻到着。地区司令官の吉田大尉を訪ねると、ちょうどドラム缶の野戦風呂にのんびりと入っていた。自分もすすめられてその後に入浴、兵舎で司令官に主計の曽我中尉もまじえて四人で会食する。曽我中尉は慶応出身の学徒兵で、銀座の曽我毛皮店の息子だという。そこで箕浦君ともども、東京の話やら銀座の最近のことなど夜の更けるまで話しこみ、遅くなったので同中尉の兵舎に泊めてもらう。特攻作戦を近く行う義号部隊は、やはり推測どおりリパ基地周辺にいた。

十一月十九日

朝、曽我中尉の車で箕浦君ともども義号部隊を訪問。義号部隊（薫空挺隊）は、さきに四航軍の参謀がもらした特殊な任務をもった部隊で、ひと言でいえば、敵飛行場に地上部隊をのせた飛行場を強行着陸させるという、文字どおりの特攻作戦である。

地上部隊を空中輸送に当たる飛行部隊についてみると、編隊長機は、隊長桐村中尉、副隊長小池中尉、機上整備田中軍曹、二番機は五島准尉、北軍曹、三番機は大沢中尉、塚田曹長、四番機は寺島准尉、高木軍曹である。使用機は捕獲品のダグラスDC―3輸送機で、これをニューギニア以来歴戦のパイロットが操縦して、夜間、敵飛行場に強行着陸をし、所在の敵航空機を爆破炎上させたのち、斬り込むのだという。

これに乗り込む地上部隊は、中重男中尉を部隊長として次の四小隊で編成される。

◇**第一小隊**＝中重男中尉、甲斐将夫曹長、清水敏次伍長、石川正信、岡野弘、山下登、藤野秀夫、宮崎一郎、西村秀夫、西山義一、河井東男、徳永正利、本田純一、西村昭秋、上田初喜各上等兵

◇**第二小隊**＝須永富蔵少尉、石田歳徳曹長、八木橋俊彦曹長、森田、稲田、池田、井手、草田、有村、結城、前田、栗原、東山、津村、田村各上等兵（兵の名前までは聞けなかった）

◇**第三小隊**＝川原英雄少尉、浜田新軍曹、金原庚鎮伍長、市川正義、大橋要莫、高橋金三郎、伊藤秀雄、矢野秀雄、菊田光治、永野賢龍、田村幸徳、金川見洙、瀬ノ口信男、金重信男、三浦豊之各上等兵

◇**第四小隊**＝加来隆少尉、木下敏一軍曹、中村寛軍曹、藤田光三、甲斐亘、久川勝康、石井誠、斉藤信三郎、石建美水、小野寺清一郎、実田健吉、林吉則、手島進、青木達一、保浦久良各上等兵

隊長の中重男中尉は大分県中津市中殿四八九の出身、陸士五十五期、柔・剣道五段『良寛論語』を熟読する二十四歳の青年将校である。

薫空挺隊はリパ飛行場から奥に入った。ニッパヤシを葺いた粗末な二軒の小屋に全員ひっそりと合宿していた。さっそく中隊長にあったが、最初は「ここがよくわかりましたね」といって驚いていたが、当方の目的を知ると全将校を集めて詳しく話をしてくれた。

目指す飛行場はレイテ島のブラウエンか、タクロバンか、ドラグか、この三カ所のうち二カ所を選んで、それぞれ二機ずつ強行着陸をする。

訓練については到着以来も毎晩休むことなくやっているという。各小隊の兵十二名、四小隊合わせて四十八名の兵は台湾高砂族の出身で昨十八年来台湾の嘉義で特別志願の青年六十名ほどに特殊訓練をほどこし、夜間でも目がよく見えるという。さらに普段からの

山岳生活で敏捷な身体を特別に訓練した結果、五メートルくらいまで飛び上がったり降りたりが自由にできるようになったので、そこから優秀な四十八名を選抜して連れてきたという。そして「今夜、その訓練をするから、ぜひ見学してほしい」ということであった。

また輸送機のDC―3については、南方航空が保有していたのをもらいうけ、桐村中尉ら九名が、これが受領と整備要領の習得、夜間飛行慣熟のため約二週間南飛行場（シンガポール）に出向し、至難といわれる夜間設備のない飛行場への着陸訓練に励んだという。

全員は夕刻、六時過ぎに食事をすませて休憩後、さっそく地図を広げて、中隊長を中心に幹部が集合して作戦の検討をはじめた。そして、あたりが真っ暗になった夜九時ごろからきびしい訓練が始まった。箕浦君の撮影するカメラのフラッシュが時折光るくらいで、あとは空一面の星空、わずかにみかづきがジャングルに淡い光を投げかけているだけだ。

訓練は敵飛行場に強行着陸した飛行機から、ころげ落ちるように飛び出して敵機に爆雷を仕掛けることを主眼に、曲芸のようなこの〝ころげ落ち方〟（〝跳降〟という）の練習をまずやる。ついで将校、下士は日本刀、兵は蛮刀（義勇刀）を奮っての突撃訓練。将校がかぶっている鉄帽の星のマークのところに夜光塗料が塗ってあって、それを遠くから見ているとジャングルの中を無数のホタルが乱舞するようで、なんともいえぬ悲壮感のあふれる美しさ。

11月26日出撃に備えて夜間訓練に励む隊員たち。右端で指揮するのが須永少尉。（撮影・故箕浦太郎）

軍服は全員草色で、四人の小隊長は白ダスキを十文字に、下士官は肩から斜めに同じく白ダスキをかけ、兵は腕章をし、義勇刀（蛮刀）を背負っていた。

やがて訓練は夜十一時過ぎに終了した。全員はただちにニッパヤシの小屋に戻り、自分も箕浦君とともにここに泊めてもらった。寝る前に中隊長らと握り飯に味噌汁の夜食をすませ、そのあと恩賜の酒〝菊正〟で杯を交わし成功を祈る。ここで桐村中尉ら輸送隊の将兵たちが最後に低い声で合唱した「男なら」の次の一節が、粗末なベットに身を横たえてもなかなか耳を離れない。

〈男なら男なら
未練のこすな浮世のことに
死ぬが男の意気地じゃないか
抱いた爆弾体当たり
男ならやってみな

この日は朝から、リパ飛行場に対する敵機動部隊からのグラマンの来襲がものすごく、一日中、機関銃の銃撃と投下された爆弾の破裂音があたりをふるわせていた。そのため滑走路にも大分被害をうけたもようだ。疲れたせいか、やがてうとうとしてくると、ジャングルの遠くでフクロウか、ホウホウと鳴くのがかすかに聞こえてくる。淋しい晩だ。

軍司令部「薫部隊」を激励

十一月二十五日

四航軍富永司令官がリパ基地で義号作戦を行うため、待機している「薫部隊」を激励のため現地に行くとの連絡を昨夜十一時過ぎ同盟宿舎で受けたので、早朝から同司令部前で司令官を待つ。午前六時、軍司令官専用の赤塗りのオープンカーに乗って富永司令官が到着したので、早速、同車に同乗させてもらう。同行は当番長の内藤准尉と同盟写真の箕浦君だ。クルマは司令官旗をはためかせて、ものすごいスピードでリパに向けて突っ走る。

普通、申告はマニラの四航軍司令部で行われるのだが、特殊な任務をもつ部隊だけにマニラでのスパイの目を避けてリパまで来たのであろう。富永軍司令官は「諸君に会ったことを光栄に思う」と言ってから、つぎのような訓示をした。

「ただいま信頼する諸君の顔を見て、軍司令官は感慨無量である。諸君を見てこの壮挙の成功疑いなきを信じる。諸君は大君のため、国のために仕え奉るように生まれてきたが、いまやその目的を果たすときが来た。たとえ戦場の華と散ろうとも、諸君の遺芳は万古千古に薫るのである」

このあと富永司令官は、部隊の全員と会食した。そこで十二月一日に進級予定の者は、きょうただ今進級させよとか、勲章をもっている者は略章をつけて行けとか、いろいろ細かく気を配っていた。また高砂族出身兵藤野秀男上等兵に対しても、家族のことなど親しく訪ねた。同上等兵は緊張で浅黒い顔を紅潮させながら、鋭い目を正面にすえて「やります」と大声で応えるなど、死出の儀式は厳粛に終わった。そして昼過ぎ、司令官は真っ赤なオープンカーに乗って早々にマニラに戻っていった。

この日もリパ飛行場に対して、午前、午後の四回にわたって敵機動部隊からのものと思われるグラマンの激しい爆撃があった。このため空襲の合間をぬってリパの町に歩いて戻り、町の中央にある二階建ての民家を接収している航空寮に泊めてもらう。

薫部隊の壮途を見送る

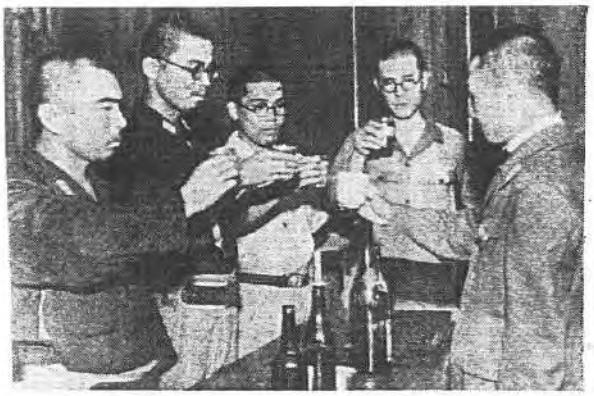
十一月二十六日

朝、飛行場にものすごい空襲があった。このため四キロほど離れたリパの町にも大きな爆撃音が連続して聞こえてきた。この空襲で飛行機の滑走路はハチの巣のように破壊されたため、飛行場大隊と第二〇八戦隊整備員らが必死の努力をして、夕刻までに飛行場の発着が可能な程度にまでようやく修復した。一方、二〇八戦隊の整備班長青木中尉は、飛行場周辺の掩体内に完全偽装で隠してあるダグラス機の安否を気遣い、各機を巡視中、米機の投下した触れれば即刻爆破する万年筆爆弾に接触して重傷を負い、不幸にもまもなく戦死したという。

自分らは午後から空襲のすきをみて「薫部隊」の宿舎を訪れ、写真をとったり取材したりしたが、兵士らは予想される今夜の出撃に備えて横になっている人が多かった。自分は中重男隊長の部屋で作戦とはまったく関係のない話をした。隊長の机には『文芸春秋』が一冊おかれ、横光利一の「旅愁」のところにしおりがはさまれていた。少し前の号だから、中尉が内地からもって来たものだろう。「こういうものがお好きですか」と聞くと、中尉は「ええ、まだ未完のままなので、生きていたら最後まで読めるのに、それができず残念です」とつぶやくように言って、はずかしそうに微笑した。その顔を見て、本当に良い顔だなァとしみじみ思った。そしてこんな立派な若者をむざむざ殺す戦争の冷酷さを思った。

夕食後「薫部隊」は服装を改めたのち、全員で壮途の成功を祈って乾杯した。全員が爆発管一キロと破甲爆雷六七〇グラムを携行、それに軽機関銃という身軽な服装である。携行食糧は乾パン、コーヒー、ビスケット、バター、コンビーフなどの三日分。

午後十時四十分、四機は進路を南東方のレイテに向けて出発していった。降るような深秋の星空の下、静かな出撃であった。長機を目視できるように各機は標識灯を点じたままである。その赤い尾翼灯が夜空にポーッとかすんでだんだんと遠ざかっていった。目指す敵飛行場に強行着陸できたら合図の青玉、赤玉の標識をあげるという約束だったので、自分たちは二時間くらい経過すればと、深夜の飛行場にじっと立ちつくし、それを確認のために飛んだ偵察機の帰還を待ったが、偵察機も戻らず、無電などどこからも、なんの連絡もなかった。深夜、夜霧にぬれながら、自分らは無言で二〇八戦隊の兵舎に戻り、泊めてもらう。兵舎の大きな窓からは、澄み切った夜空にこぼれるような満天の星が眺められたが、時々流れ星の光がスーッとその一隅を横切って、なにか高ぶって仕方がなかった。



11月26日夕、出撃を前にしての乾杯。向かって左が中重男隊長、以下、須永、川原、加来少尉。右は見送りの四航軍参謀

隊員に最後の注意を与える中重男隊長（右端後ろ姿の人）

追記

こゝに転載した通り大森記者の「比島従軍日記」の薫空挺隊の人名について、第二小隊の一二名の上等兵（高砂族）は姓だけが記載されており、兵の名前までは聞けなかったと断っているそこで靖国神社小方遊就館部長にお願して御祭神名簿を調べてもらった。

薫空挺隊の本属部隊は遊撃第一中隊である。同隊のレイテ戦死者を拾ってみるとこれらの姓の者は見出せるが、二人だけ同姓の者がいてどちらが薫空挺隊に属していたのか、判断の資料がない。レイテで戦死した者は全員戦死年月日が20年7月8日、レイテ島レイテ富士附近になっている。判らないのでそのように認定したのであろう。以下氏名だけを記載するが※印のものは同姓が二名あるので両者を掲げておく。

森田実、稲田茂、池田三郎、井手敏、草田良夫、※有村春男、※有村繁敏、結城文夫、前田隆男、栗田二男、東山春夫、津村重行、※田村久夫、※田村幸吉。

これらの人の本籍地は如何にも高砂族らしい地名である。死没時遺族名をみると父、母、妻等で、高砂族の名前の人が多い。妻のある人は四名。遺族年金がもらえないのは断腸の思いがする。

知覧特攻会館に薫空挺隊のコーナー設置される。

薫空挺隊はその母隊である遊撃第一中隊に生還者が現存しないので、顕彰施設が何処にもなかった。今般鹿児島県哈良町在住の土橋和典氏の尽力によって、知覧特攻会館内に薫空挺隊のコーナーが設けられることになった。土橋氏は台湾高砂族兵士の活躍振りを調査し、「台湾高砂義勇兵の奮戦」なる一書を刊行された。その中に薫空挺隊のことが含まれているので、特攻隊ということで知覧の特攻会館に掲示を依頼した。知覧の特攻会館は従来沖縄特攻を顕彰すること主眼としていたが、同じく特攻隊であるという訳で、会館の増築部分に比島作戦のことも採り上げることになり、薫空挺隊や高千穂降下部隊の写真も掲げてある。

11月末現在薫空挺隊については、この写真に若干の解説文だけであるが、他の特攻隊と同様に全員の顔写真を掲げたいというのが会館主務者の意向である。そこで我が協会では次の者の写真を入手したので、早速送付した。

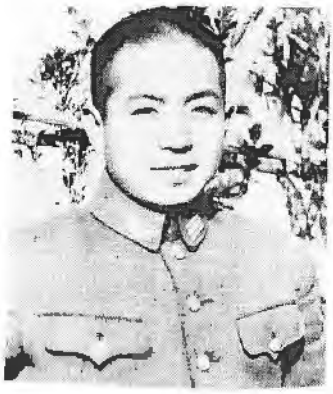
隊長　中　重男中尉
208戦隊　桐村浩三中尉
大沢正弘中尉

掲てある写真

今回提供した写真

中　重男

桐村浩三



大沢正弘

中重男中尉の写真の裏にある歌

身はたとえ敵の真中に散りぬとも
魂はとゝめて皇国護らん

知覧特攻会館は年間6万人の参観者があるという。交通不便という難点はあるが南九州における一つの名所となっている。このような施設に展示することが後世に語り伝える有効な手段であり、我が協会としても大いに協力すべきである。

会員に対するお願い

薫空挺隊員の顔写真を探して頂き度い。遊撃第一中隊から出ている者の氏名は前に述べた通りで、内地人のものは何とか入手できると思う。台湾出身者の分手がかりある人は御協力お願したい。208戦隊の者もあと六名、既刊の「特別攻撃隊」に氏名出身別出ている。

中央が特攻会館

高千穂降下部隊を讃える歌

――この中の一部で初めから収容の見込みのない目標に向う部隊は、特攻隊ということで出撃して行った。海上に撃墜され浮游していて敵に捕えられた者が四名許りいるが、それ以外一名の生還者もない――

レイテに咲く花

一　神の歩みし日向路に
　秋の祭の夜は更けて
　飛電は告ぐる「捷一号」
　今宵名残の笛の音は
　庭のさんしょに鈴かけし
　想の人よ、わが胸は
　もののふの道踏み征かん
　疾きこと風の如く去ぬ

二　「今日咲きて明日散る花」と若人の
　「悲しき命積み重ね」
　神風呼ぶか特攻に
　ルソンの基地は火と燃ゆる
　「雲染めて屍悔なく散る」という
　サンフェルナンドの壁の文字
　目指す主力はブラウェン
　サンパブロ　ドラッグ　タクロバン

一、昭和19年10月20日敵はレイテ島に上陸、その二日前に比島方面決戦の捷一号が発令されていた。当時陸軍の落下傘部隊である挺進第一乃至第四聯隊は宮崎県唐瀬原基地に、挺進飛行第一、第二戦隊は新田原基地にあり、共に陸軍挺進練習部長の隷下にあった。

10月24日、第二挺進団の第一陣として挺進第三聯隊に動員が下令され、数日遅れて第四聯隊と第二挺進団司令部及び挺進飛行第一戦隊に動員が下命された。更に若干遅れて挺進飛行第二戦隊の一個中隊がこれに加はった。聯隊や戦隊は常に戦時編制を採っており、挺進団司令部は挺進練習部で編成するのであるが、動員計画に決められているので、どの部隊もすぐに編成完結した。部隊長と通称名は次の通りである。

第二挺進団　高千穂　　大佐徳永賢治
　挺進第三聯隊　香取　　少佐白井恒春
　挺進第四聯隊　鹿島　　少佐斉田治作
　挺進飛行第一戦隊　霧島　中佐新原季人
　挺進飛行第二戦隊第一中隊阿蘇大尉三浦　浩

先陣の挺進第三聯隊は翌25日には日豊線川南駅を発って佐世保に向った。

何日征くか何日散るのかは知らねども
　今日のつとめに我は励まん（詠人不知）

覚悟はできていたが慌しい別れだった。

さらばとて握れる夫のたくましき
　み手のぬくもり今も残れり（ある妻の歌）

聯隊は佐世保で空母「隼鷹」に搭乗し決戦場に向った。

二、隼鷹は敵の空襲を避けボルネオのブルネーに寄港し、11月11日マニラに入港した。荷役作業実施中の13日マニラは大空襲を受け、戦況の容易でないことを知る。ここで空路到着した徳永挺進団長の掌握下に入り、クラーク基地のアンフェレスに落着くが、航空特攻は先月25日の神風敷島隊を鏑矢として既に開始されていた。

今日咲きて明日散る花の我が身かな
　いかでその名を清く留めん（詠人不知）

この歌は海軍神風特攻隊員の遺詠という。

ますらおの悲しき命つみ重ね
　つみ重ね守る大和島根を

この歌は三井甲之という歌人が、昭和二年に駆逐艦蕨が演習中に沈没し殉職した知人を悼んで詠んだものであるが、この頃の我々の心境にふさわしいので愛唱歌になっていた。

レイテ空挺作戦はブラウエン地区の三つの飛行場を奪取し、脊稜山脈を越えて進出する第二十六師団の部隊と提携してタクロバン平野に対する攻勢の初動を掴もうとするものだったが、レイテ湾沿いのタクロバン、ドラッグ両飛行も同時に制圧しようと、特攻隊ということでここにも一部を差向けることになった。第一次降下部隊白井聯隊長以下約五〇〇名が、12月6日午後三六機の輸送機と四機の強行着する重爆でアンフェレスを発ったが、宿舎の壁に次の歌が書き残されていた。

花負いて空うち行かん雲染めん
　屍悔なく　我等散るなり（詠人不知）

三

鵬翼千里南冥の
空を圧して進めども
逆巻く砲火如何にせん
辛くも降りし百余名
ブラウェンに屯せし
敵雑軍は蹴ちらせど
後援続かず補給なく
剣は折れて矢弾尽く
抜山蓋世の勇あるも
時に利あらず騅逝かず
捨つる命は軽けれど
青史に一言残さんと
五十余日の山越えに
聯隊長の一行は
カンキポットに辿りつき
魂魄ここに留りぬ

四

一番乗りは譲りしも
ブラウェンに続かんと
思は走せる決戦場
命、卒然と下りしは
オルモックの急救うべし
大廈崩るに似たれども
五百の精兵欣然と
バレンシャに舞い降りぬ

五

三、目標上空に到達したのは計画通り薄暮だった。レイテ湾岸沿いのタクロバンとドラッグに向った部隊は、地上及び艦船からの物凄い対空砲火を受け殆んど撃墜されてしまった。海上に墜落し浮游していて翌朝敵に捕えられた者が四人いる。これらの人の証言や米軍資料をみても両飛行場制圧は不成功に終った。

ブラウエン地区三つの飛行場に向った部隊のうち、ブラウエン北飛行場に降下した白井聯隊長以下の行動だけは明確に伝えられている。これは聯隊長の手記が、後にセブ島に脱出した四聯隊の将校の手で戦後持ち帰られたからである。それに拠ると降下した晩北飛行場の敵は潰走し、後半夜到着する筈の第二次降下部隊の為夜通し航空燃料等を燃し続けた。一方ルソン島のリパでは第二次降下部隊が待機していたが、帰って来た輸送機は八機に過ぎなかった。それでも重火器中隊を載せて発進したが、脊稜山脈上空は雲深く遂にブラウエン上空まで行くことができなかった。

四、ブラウエン北飛行場に降下した白井聯隊長は六〇名許り掌握したが、その晩北飛行場に突入した筈の第十六師団の部隊とは提携できなかった。この部隊は敵上陸以前からレイテを守備していた師団で、この頃一部が山の中に残っていた。翌7日戦車を伴う敵の反撃を受けそれ以上掌握できないので、山越えで進出して来ると聞いていた第二十六師団と提携しようと8日になって南飛行場の方に移動した。南飛行場にも一個中隊降下した筈だが消息全く不明で、10日になって第二十六師団の小部隊と出合った。

18日になって第二十六師団の重松大隊と合流し、敵一個師団が西海岸のイピルに上陸した為ブラウエン進攻作戦は取り止めになったことを知った。その後いつどこで承知したか不明であるが、第三十五軍はカンキポットに集結することになっていると知らされ、五十日余りかかってカンキポットの軍司令部に辿りつき、白井聯隊長はここで陣歿した。

五、挺進第四聯隊は一部を第一次降下部隊として参加させていたが、主力は翌7日にブラウエン北飛行場に後続部隊として降下することになっていた。ところが西海岸のオルモック南側のイピルに新手の敵が上陸し、ブラウエンに向う作戦が取りやめとなり、オルモック救援作戦を行うことになった。レイテには従来からいた第十六師団のほか、敵侵攻後に投入された第一師団、第二十六師団等がいたが、全部東方から迫って来る敵に対して展開しており、島内の指揮中枢であるオルモックには予備隊は皆無だった。鈴木軍司令官はブラウエン作戦を指導する為東方のルビに在り、オルモックの軍司令部には参謀長が留守を守っていた。

挺進第四聯隊は8日から14日まで六回に分れて四八一名がオルモック北方一二キロのバレンシャに降下し、友近参謀長の指示を受けオルモックの攻防戦に参加した。六回にも分

六　勝に驕れる敵兵を
　　渦巻き返す反撃に
　　軍司令官の一群は
　　危く虎口を脱したり
　　二万の敵の猛攻に
　　激闘二旬食もなく
　　最後を飾る斬込みは
　　敵心胆を奪いたり

七　レイテの空に咲きし花
　　眦高きつわものの
　　色よ香よ今いづこ
　　人の心はうつろえど
　　「あらわさん大刀のほまれ」と詠いつつ
　　勇躍征きし若人の
　　遺烈は永久に伝うべし
　　その名高千穂降下隊

れたのは使える輸送機が少なかった為である

六、8日先陣の一個中隊がバレンシャに降下しオルモックに駆けつけたが、市街地は既に敵に占領されていた。10日には斉田聯隊長以下一個中隊がバレンシヤに降下し、友近参謀長の指示を受け、8日に降下した先遣中隊も掌握してオルモック北側でバレンシヤ方向に通ずる道路の東側に陣地占領した。これより先友近参謀長はドロレスに集結していた今堀支隊（26D独歩12今堀聯隊長の指揮する二個大隊）を本道沿いに陣地占領させていたので、斉田聯隊を今堀支隊に配属し、それに連繋して陣地占領させたのである。

斉田聯隊は数回に亘り後続部隊がバレンシヤに降下し戦場に到着するので、士気極めて高く、熾烈な砲撃を浴びても陣地を確保し、夜は敵後方に盛んに斬込みを行って敵を悩した。この活動があった為に一時行方不明になっていた軍司令官以下が、後方のファトンに到着できた。16日本道沿いの今堀支隊の陣地は突破され敵は奔流のように北上した。

七、斉田聯隊は断平陣地を固守していたが敵は続々と北上し、オルモック近傍にいても意味がないので、ナグアン山の麓で自活し、翌年2月5日カンキポットの軍司令官のもとに到着した。その時の人数は約百名だった。一方ブラウエンから転進した白井聯隊長以下数名はこれより前1月26日にここに到着していたが、白井聯隊長は斉田聯隊長到着の前日陣没している。斉田聯隊の聯隊長以下七六名は軍司令部の護衛として3月17日大発に搭乗してレイテを脱出しセブ島に渡った。その中の二十数名が戦後帰還した。12月6日にブラウエン等に降下した者には一名の生還者もないが、斉田聯隊の生還者によってある程度の実相を知ることができた。

あらわさんときは来にけり千早ぶる
　神に仕えし太刀のほまれを

ブラウエン南飛行場攻撃隊長だった第三聯隊第二中隊長桂善彦大尉の遺詠である。この中隊の降下後の行動については全く分らない。

タクロバン攻撃隊は重爆に乗り強行着陸する特攻隊ということで出撃していつた。

特攻扱にされていない特攻隊

高千穂部隊の タクロバン・ドラック攻撃隊

レイテ空挺作戦を目ざし高千穂部隊（第二挺進）は、ルソン島クラーク航空基地のうちのアンフェレス飛行場にあって、作戦準備を進めていた。それより先11月22日徳永団長はマニラにある4航空軍司令部に出頭し「テ」号作戦の内示を受けた。そのとき「テ」号作戦に先立って行はれる薫空挺隊の義号作戦のことも知らされ、戦況の容易でないことを深刻に認識した。4航軍から示された高千穂部隊の任務は、第26師団の進出に先立ってブラウエン北南両飛行場に降下して、飛行場を占領することだった。そのとき徳永団長の掌握している兵力は、挺進第3聯隊と挺進飛行第1戦隊（三個飛行中隊、但し飛行中隊は台湾の嘉義で待機中）だったので、挺進第3聯隊の主力をもってブラウエン北飛行場を、一個中隊をもって同南飛行場を奪取させる積もりだった。

クラーク飛行場群からは陸軍の特攻機が次々と出撃し、基地全体が沸き上がり、しかも悲壮感につつまれていた。11月26日薫空挺隊の義号作戦が決行され、そのニュースが高千穂部隊に伝わるや、これに対する反応は大きなものがあった。以下述べることは挺進団司令部部員弘中郁夫少佐（戦後物故）の述懐談を根拠に記述する。

その第一は、我々だけが為し得ると思っていた空挺作戦を、たとえ落下傘降下ではないにしても、全く関係のない部隊が、突如現れて先を越したことに対する軽い反感である。

更に、奇襲を生命とする空挺作戦において、同一目標に対し、わが手の内をみせてしまうことは愚策である。4航軍は何を考えているのだ、という非難がこれに加わって、けんけんがくがく、論議された。

しかし非難ばかりではない。薫空挺隊の兵士は、台湾高砂族出身の志願兵であると聞き、新附の民でさえ、お国の為命を捨てて戦っているのに、われわれが後れ取っては相済まぬ。敵飛行場を制圧することがそれほど必要ならば、ブラウエンだけでなく、ドラッグ、タクロバンの両飛行場も一部で攻撃したらよいだろう。何も地上部隊と合流できなくても構わぬ。この案を強く主張したのは団司令部の佐藤中尉であった。佐藤中尉は沖縄出身で空手の名手、立派なカイゼル髭をはやし、威風堂々、容貌は閣下級であった。団長の前に進み出て、「敵飛行場の中で、タクロバンが一番活躍していると聞きました。これを目標から外しては、今度の作戦画龍点睛を欠くことになります。タクロバン殴り込みをやりましょう。この佐藤にやらせてください」

烈々たる気迫、タクロバン飛行場を踏み潰す勢いであったが、団長はそのときはまだ決しかねた。

そうこうしているうちに、遅れて内地を出向した挺進第4聯隊が12月1日北サンフェルナンドに上陸し、聯隊長斉田少佐は先行してアンフェレスに到着した。更に新田原で練成中の挺進飛行第2戦隊から一個中隊（三浦中隊）を第1戦隊に増加することになり、その中隊が嘉義に到着したという通知を受けた。4聯隊長斉田少佐は、到着早々自分の聯隊も一部でもよいから第一次挺進部隊に入れてそれと要請した。その勢は強要だったという。そこで徳永団長は4航軍に意見具申し、新にサンパブロ、トラッグ、タクロバンにも一部兵力を指向することになった。

結局「テ」作戦は第一次挺進だけで打ち切られ、しかも四百数十名に一名の生還者もいないのだが、作戦を発起するときは、ブラウエン北と南、サンパブロに降下する部隊は地上進攻部隊と合流できると思っていた。しかし、レイテ湾沿岸にあるタクロバンとドラッグに降下する部隊は、地上部隊と提携の見込みがないので、特攻隊と認識されていた。その部隊は次の通りである。

この部署は文書資料が残っているの

目標	ドラッグ		タクロバン	
差出部隊	挺3	挺4	挺3	挺4
指揮官	竹本中尉	宮田中尉	佐藤中尉	榊原大尉
配当機数	重爆二	輸送機七	重爆二	輸送機二
降着別	着陸	降下	着陸	降下

で、計画段階としてはこの通りだったらう。同一目標に対し両聯隊混合なのは、徳永団長の両聯隊に対する配慮からだったという。ドラックに宮田中尉の一個中隊を向けたのは、敵中を突破してブラウエンまで来ることを期待したらしい。タクロバンの佐藤中尉は前述の団司令部付の佐藤中尉で、特に本人の希望を容れたものである。輸送機九機は全部三浦中隊、重爆四機は4航空の部署により74戦隊と95戦隊から二機づつ配属されたものである。

先に生還者は一人もいないと申したが、レイテ湾に撃墜され上海に浮遊していて捕らえられた者が四人いる。その中の一人三浦中隊の操縦者だった一下士官が戦後証言をしたところによると、計画では降下となっているが、三浦中隊長はとても降下などできない、着陸してしまえと、出発直前に命じたという。何れにしても三浦中隊は一機も戻って来なかった。

この攻撃部署を決めるにあたり、徳長団長と各指揮官とのやりとりについて、前述の弘中少佐の談話に基いて記述してみる。

ドラッグは、ブラウエン東方二〇キロ、レイテ東海岸にあて敵主力の上陸地点である。一個中隊足らずの兵力で占領できる目標ではなく、地上部隊の進出目標にもなっていない。徳永団長は宮田、竹本両指揮者を呼び、

「敵に一撃を与えたならば長居は無用、密林中を潜行しブラウエンまで帰って来い。無理をしなくてよい」と懇々と諭した。両指揮官とも、

「団長殿、御心配なく、どうせ敵後方部隊は弱いにきまってますか」

と答えた。

タクロバンについては更に深刻である。タクロバンは、ブラウエンから四〇キロ、第1師団の戦線であるリモンから六〇キロ、敵の後方最も遠い処であって、降下部隊を収容する途は全くない。

これを目標に選んだのは、斉田聯隊長と佐藤中尉の強い建議による。

徳永団長は、榊原大尉と佐藤中尉を呼び、

「場所は明確にでないがタクロバン西方の山地にはまだ第16師団の拠点がある筈だ。目的を達成したらこれに合流せよ」

と、オルモックまでは行くが、自ら最前線には立たないとういう相済まないような気持ちで、このように話しかけた。しかし両名とも、そのようなところに脱出しようという気持ちは更にない。

佐藤中尉は、

「最後まで飛行場付近に隠れ、遊撃戦を続ける積り」

と答え、榊原大尉に至っては、

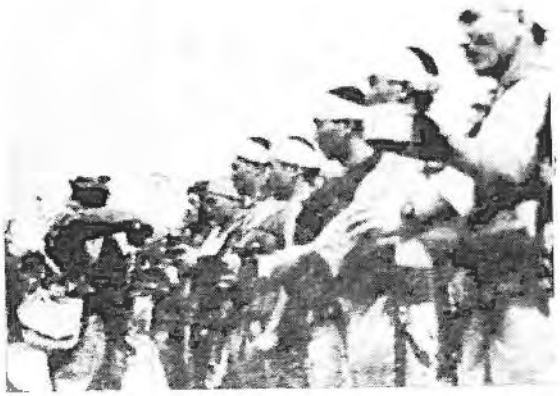
「息の根の続く限り、飛行場で暴れまくる覚悟」

と一挙玉砕を決めていた。

徳永団長の考えでは第二次降下で3聯隊の残部を聯隊長のもとに追求させ、その後は状況をみて、4聯隊主力をどこかに投入する。これまでをアンフェレスで指揮し、その後オルモックに前進し、第35軍司令官の指揮下に入り、タクロバン攻撃部隊も何とかして収容の途を講じようと淡い希望を抱いていた。

団司令部のオルモック推進のため、この頃部員の稲本少佐を同地に先遣した。

収容の見込みのないこれらの部隊の人選を、どのようにして行ったのか、一部の部隊しか後世に伝はっていな



タクロバン強行着陸隊
上　徳永団長と佐藤中尉　中　隊員に酒を注ぐ佐藤中尉　下　搭乗前

い。佐藤中尉の指揮を受けタクロバンに強行着陸する部隊は、3聯隊で特攻隊として募集したところ、志願者が殺到した。第3中隊は初から第二次挺進部隊とされていたし、第一次挺進の中隊でも輸送機の制限で第二次に廻された者もいた。それらは挙つて志願した。レイテ湾に撃墜され捕らえられた一曹長は、第二次挺進に廻されむしゃくしゃしていたところ、特攻隊の話が出たので、どうせ死ぬなら華々しく戦って死のうと、真先に志願したと戦後述懐している。海上に撃墜されたが救命胴衣をつけていたので浮かんでおり、一夜明け精神朦朧としていたら、敵の魚雷艇のような船が来て、鉤で引き上げられた。殺せと叫んだが、船の営倉のようなところに抛り込まれたと語っている。

タクロバン降下部隊の指揮官の榊原大尉については逸話がある。一年以上前のことになるが、宮崎県の川南にいた頃、榊原中尉が計画指導した演習で高鍋町の北を流れている小丸川を渡渉する場面があった。前日山間部に降った雨で増水しているのに気付かず、八人を溺死させるという事故を起こした。そのとき責任を負って割腹自決しようとしたが、戦場で必ず死処を与えると聯隊長に言はれ思い止まった。

聯隊長は替っていたが申送りがあったのだろう。タクロバン攻撃の話が出たとき、斉田聯隊長はすぐに榊原に告げたという。榊原は何処で手に入れたのか、二階級特進だと言い中佐の階級章をつけ、八人の位牌を抱いて強行着陸機に乗込んだと伝えられている。

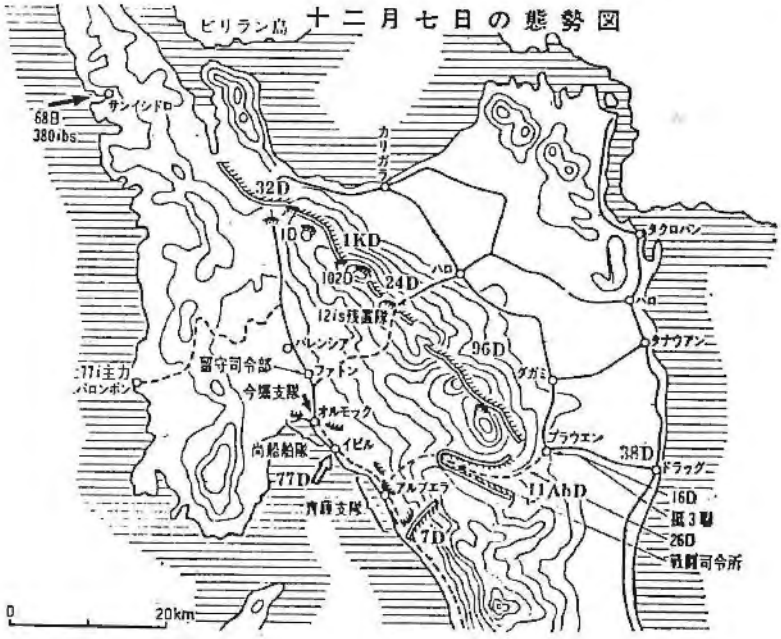
結局「テ」号作戦は翌日敵が西海岸のイピルに上陸したので、全面的に取りやめになり、特攻隊と称して出撃した者も、地上部隊と合流できると期待して出て行った者にも、捕虜となった四人以外一人の生還者もいない。

特攻隊について多くの記録が残されており、正規の特攻隊戦死者は二階級特進し、その名簿も整備されている。しかしここに述べた人達のように、絶対生還の見込みのない任務に欣然と立ち向って行った人達のいたことは、後世に語り伝えなければならぬ。

（田中賢一）

目指すタクロバン飛行場

出撃前の気勢



宮崎県川南護国神社例大祭

この神社には嘗てこの地に基地を置いた陸軍挺進部隊一万有余の戦死者も合祀してある。

秋の例祭は毎年11月23日に奉賛会長である町長が祭主となって行はれる。

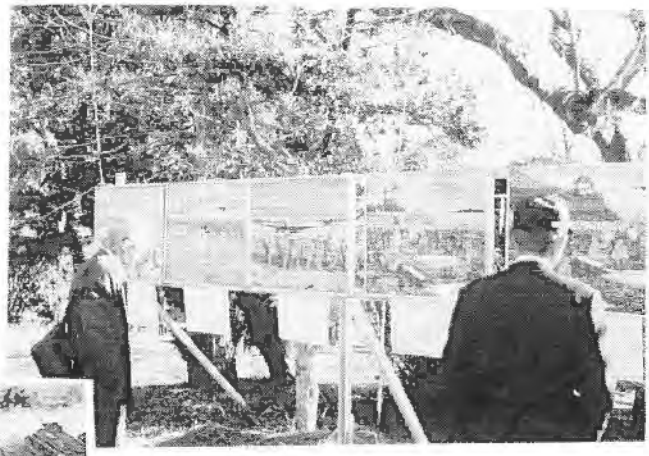
当日挺進部隊関係者戦友と遺族約一〇〇名が遠くは北海道からも参加し、亡き戦友を偲びまた若い日の練武の地に立ち懐旧の念にひたった。

川南護国神社例祭に参じて

洋々たりや日向灘　昇る朝日に照り映えて
尾鈴の山は緑濃く　神より承けし美し郷（うまさと）
トロントロンの声聞きて　遠き昔の憶あり
祖国の守りに神去りし　我が戦友の面影は
この並木路と重なりて語りしことの数々は
松籟と化し響きあり　星は流れて五十年
今階（きざはし）に額突けば　思い果てなき若き日々
我が拍手は奥宮に　軍歌の響と届けまし
御心易く鎮まれよ　山紫水明のこの里に

註　トロントロンとはこの附近の地名

川南護国神社に奉納した油絵



挺進部隊関係御祭神の為に次の各部隊の活躍の場を表す20号の油絵17点を既に奉納してあり、今回も境内に展示された。

陸軍挺進練習部、挺進第一～第四の各聯隊、滑空歩兵第一・第2聯隊、挺進戦車・工兵・通信・機関砲・整備の各隊、挺進飛行戦隊、滑空飛行戦隊、義烈空挺隊、空母雲竜搭乗部隊

川南町出身の御祭神六百余柱の為に100号の油絵を奉納した。これは護国神社の社殿を中央にし、四周に御祭神の姿を象徴的に画いたものである。

以上全部の油絵は特攻協会会員の松本画伯の筆になるもの。